

(6) 小松天満宮と梯川改修をめぐる環境アセスメント

ENVIRONMENTAL ASSESSMENT ON PRESERVATION OF THE KOMATSU
TENMANGUU SHRINE AND CONSERVATION OF THE KAKEHASHI RIVER

○松井三郎、 地井昭夫、 内藤 達
Saburo MATSUI*、Akio CHII**、Tohru NAITO***

ABSTRACT: The results of environmental assessment on preservation of the Komatsu Tenmanguu Shrine and conservation of the Kakehashi River were reported. The historical and cultural importance of the shrine which was designated as a national important cultural asset was described. The shrine was also evaluated its importance in the urban planning of Komatsu City. The results of questionnaire survey to Komatsu citizen on preservation of the shrine and conservation of the river showed that they hoped the both preservation and conservation works were necessary without creating contradiction between them. In conclusion, it was recommended that the city had to make her own urban planning of long range development which includes both the river conservation and the shrine preservation programs.

KEYWORDS: Komatsu Tenmanguu Shrine, Kakehashi River, Environmental Assessment, Questionnaire Survey.

1. はじめに

石川県小松市にある小松天満宮は明暦3年(1657)に創建され、加賀地方の天神信仰の拠点として三百有余年の社歴を有する由緒ある神社であり、江戸初期の優れた建築様式を今に伝えるところから昭和36年(1961)、国の重要文化財に指定された貴重な文化遺産である。一方、近年の小松市における地域開発の進展、市街地の拡大等に伴い一級河川梯川の河川改修計画が立案され、実施に向けての検討が関係機関、議会等で重ねられている。小松天満宮はこの梯川河畔に立地しているため、同天満宮の保存問題が河川改修計画推進の上で焦眉の課題として浮上してきた。こうした中で、文化庁並びに石川県より地元小松市としての意見が求められ、そこで小松市教育委員会が「小松天満宮等専門調査会」を組織し次の目的で活動することになった。「調査会は、梯川河川改修並びに小松天満宮の歴史、建築技術及び自然環境等に関する事項を調査審議するとともに、小松天満宮の保存活用について、市長に意見を具申するものとする」(調査活動期間昭和59年2月7日—60年3月31日)。筆者等(松井、地井は委員、内藤は委員補佐)はこの「調査会」(矢ヶ崎孝雄金沢大学教育学部教授を会長に13名の委員で歴史環境、社会環境、建造物、自然環境、河川部会を構成)に参加し「社会環境部会」を担当し

*京大環境微量汚染制御実験施設 Laboratory for Control of Environ. Micropollutants, Kyoto Univ.. ** 金沢大学教育学部 Faculty of Education, Kanazawa Univ.. ***エックス都市研究所(株) EX Urban & Environmental Research Institute Co., LTD.

て報告書作成に寄与した（報告書発行昭和61年3月31日）。この問題は、「河川改修－防災」と「文化財保護－宗教活動の維持発展」と言う次元の異なった「環境・社会システム」の要素がいわば対立関係として提示されている。このような問題をどの様に捉え、どの様な解決の提案を行ったか紹介し、さらに問題として残されている点を明らかにしたい。

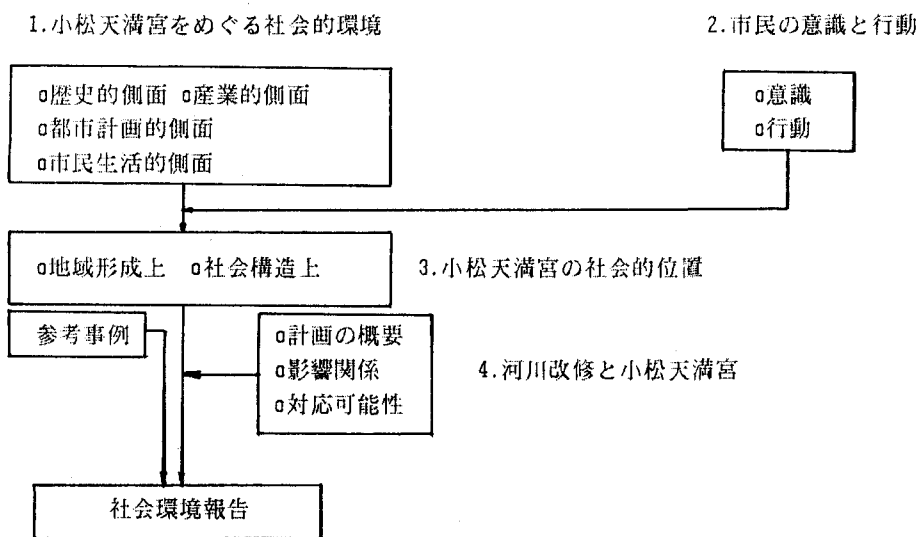
2. 小松天満宮等専門調査報告書「加賀 小松天満宮と梯川」の概要と調査委員の所感

小松天満宮等専門調査報告書「加賀 小松天満宮と梯川」の概要を紹介する。第一部小松天満宮の歴史と環境、§1 小松天満宮の地理的環境（矢ヶ崎孝雄）、§2 小松天満宮とその周辺の歴史（北野勝次）、§3 小松天満宮と信仰（小倉学）、§4 小松天満宮をめぐる都市空間と社会環境（地井昭夫、松井三郎）、§5 小松天満宮の建築（田中俊之）、§6 小松天満宮及び周辺の地盤・地質（関戸信次）§7 小松天満宮及び周辺の生物（代崎良丸・中山佐一郎）、第二部梯川水系の歴史と展望（高瀬信忠、中川武夫）§8 梯川水系の歴史、§9 梯川水系の現状、§10 梯川水系の将来展望。

「調査」を行う前提として、小松天満宮の現状がどのようなものであり、梯川の状況がどのようなものであるか出来るだけ新しい知見を見出し報告すること、従って小松天満宮の移転を前提としないことが確認された。しかしながら後述するように、調査の進行過程で情報の交換がなされたものの、十分な議論なしに調査会の最終で委員各人が所感の形で移転についての意見表明を行うことになり、各人の移転に関する意見を「報告書」の「あとがき」に記している。このことは、「環境アセスメント」を行うべき委員会の機能を十分に発揮することなく、結論がでないままに終わっていることを示しているといえよう。所感提出委員12名の内容を筆者等が私見で解釈すると、移転賛成あるいはやむを得ない5名、明確な表明なし3名、移転反対4名となった。

3. 「小松天満宮をめぐる都市空間と社会環境」調査の体系

調査を担当した筆者等は、小松天満宮周辺地域の社会的環境、小松天満宮をめぐる市民の意識と行動、小松天満宮の社会的位置及び河川改修と小松天満宮との関係について現況と問題点を明らかにすることを目的に図－1に示す調査体系をたてた。



図－1 調査の体系

4. 小松天満宮をめぐる社会的環境

4. 1. 歴史的側面

(A) 小松天満宮の創建. 小松天満宮は、「三壺記」によれば明暦3年(1657)、前田家三代利常が小松城隠居を行う際に、京都の北野天満宮を模して建造したもので、建築には京都建仁寺流を受け継ぐ大工山上善右衛門が当たった。神体は菅公の画像で、北野の社僧であった松雲庵能順が初代別当職となった。江戸時代は、梯天神または梅林院と呼称され、社領百石を有していた。明治6年郷社となり、梯神社と改称した。昭和10年県社となったが、敗戦によって社格称号が失われた。昭和36年天満宮の多くの建造物の内本殿、石の間、幣殿及び神門が国の重要文化財に指定され、今日にいたっている。

(B) 小松城下町形成. 小松天満宮が建造された時代以前の小松の都市形成は、天正4年(1576)若林長門が本格的に築城した時から始まる。天正8年織田信長に敗れ村上義明が代って入城し18年間統治したので城下町としての体裁を整えた。義明が越後に転じたあと丹羽長重が移り浅井暲の合戦のあと、在3年で領地没収され、慶長5年(1600)金沢城主前田利長がこれを得た。慶長8年(1603)江戸幕府開府とともに小松は加賀藩に入り城代が置かれ城下町としての性格は維持された。3代利常は寛永16年(1639)幕府より隠居が認められ17年に小松入城した。この利常移住により、小松城の大増築、亭や書院等の建築、庭園の増築、10数カ所におよぶ社寺の造営・移築といった大プロジェクトによって小松は一挙に都市規模を拡大した。利常は没する万治元年(1658)まで、幼少の4代光高にかわり実質政治を行ったために小松は加賀・能登・越中三国の行政の中心となった。小松天満宮はこの時期に建てられた社寺の一つで、前田家の祖先が菅原道真であるとするところから特に京都北野天満宮に模して1/4の縮小した天満宮を造営した。梯川の右岸にある造営位置は、小松城の北東鬼門の方向にあり、小松城の防衛機能、祖先神の加護を考えたものと解釈できる。この時同時に小松城防衛の為に12寺院を周辺より移転し城下の通路の要所の配置している。利常没後小松城は二の丸が撤去され家臣団も金沢に去り城下町の機能を失った。その後は北陸街道の要衝としてまた安宅港を中継港とする北回り船の舟運の要衝として商工業が栄えた。明治になり廃藩置県後城郭が撤去された。

(C) 明治期より現代. 明治になり天満宮は、加賀藩からの財政的援助基盤を失い、また特定の氏子集団を持たないことから運営上困難な事態に直面するが、一般の参詣者は絶えることなく碑、額、古画、鳥居、灯籠などの器物のほか、献茶、謡の奉納献詠など多岐にわたっており、地域からの崇敬が篤かった。小松天満宮にとって最も大きな環境の変化は、昭和10年すぐ横の小松大橋の架橋により、それまで船により渡河して参詣していたのが直接徒歩による参詣になったことと、同時に梯川の改修(堤防かさ上げ)で境内が割愛されかつコンクリート橋と河川堤防で囲まれてしまったことである。これらのあと参詣者が減ってしまった。昭和13年から26年まで第二次世界対戦の戦況の激化、敗戦、混乱と天満宮の活動は停滞した。昭和32年戦後一転した価値観の支配する中で、民間人有志のボランティアによって天満宮奉賛会が発足した。氏子組織のない天満宮にとって、信者あるいは崇敬者の組織化というのは創建以来の画期的な事業であった。この事業の成功を背景に国重要文化財の指定が、小松市内の神社寺院建造物の中で一社だけ指定されたことは天満宮にとって大きな意味を持つものであった(表-1 小松市の史的遺産(建造物)参照)。昭和44年「都市計画法」が施行され、同50年「文化財保護法」の一部が改正され都市における美観、風致と伝統的建造物群保護に関しての施策が国より打ち出されてきた。天満宮をめぐる広義の社会的環境は一昔前の「近代化」至上ムードから徐々に変化しつつある。すなわち一般的傾向としては、都市におけるアメニティ要素としてのオープンスペースを既存の社寺空間に求めたり、若年層の間で社寺参詣が復活したりする傾向がでてきている。これが直ちに天満宮の位置付けに結びつくわけではないが、国重要文化財に指定された施設としては、今後都市計画の中で当然考慮の対象とされよう。

表 1 小松市の史的遺産(建造物)(「市勢要覧」より作成)

種別	名 称	所 在 地	指定区分	指定年
建 造 物	1. 那 谷 寺 三重塔、護摩堂、鐘楼、本堂 書院及び庫裡	那 谷 町	国指定重要文化財	昭和25、28
	2. 小松天満宮 本殿、石の間、幣殿及び拝殿、神門	天 神 町	"	昭和36
	3. 葭 島 神 社 神殿	大 川 町	県指定文化財	昭和44
	4. 来 生 寺 寺門(小松城の鯉橋門を移築したもの)	園 町	市指定文化財	昭和38
	5. 牧 姫 塚 五輪石塔	牧 口 町	"	昭和40
	6. 小松天満宮 十五重の石塔	天 神 町	"	"
	7. 合掌造民家	殿 町	"	"
	8. 連房式萱葺	八 幡	"	"
史 跡 ・ 名 勝	9. 那 谷 寺 庭 園	那 谷 町	国指定史跡名勝	昭和 4
	10. 安宅の関跡	安 宅 町	県指定文化財	昭和14
	11. 浅井堰古戦場	大 願 町	"	昭和16
	12. 小松城本丸やぐら台石垣	丸 の 内 町	市指定文化財	昭和38
	13. 埴田町の虫塚	埴 田 町	"	"
	14. 仏御前屋敷跡 仏御前墓	原 町	"	"
	15. 御 幸 塚	今 江 町	"	"
	16. 荒木氏の庭園	西 町	"	昭和44
都 市 基 盤 そ の 他	17. 中心市街地の町割り、街路パターン、水路 及び町名	大川町・船場広 に至る間	——	——
	18. 前田利常によって城下に集められた社寺	大川町、材木 町、細工町 東町など	——	——

(D) 歴史的遺産建造物としての位置付け。歴史的遺産建造物としての位置付けは、以下の様にまとめられる。(1) 小松が都市化を始めた16世紀末当りから現存する史的遺産の内、属地的性格の強い建造物、史跡・名称及び都市基盤を上げると表-1のとうりである。国重要文化財は天満宮だけであり、那谷寺は国指定史跡名勝である。(2) 中心市街地の建造物群は自然発生的なものでなく、城下町形成のため意図的に配置されたものである。その中で、天満宮は都市生誕以来の貴重なモニュメントで、小松市の歴史的及び空間的原点ないし不動点の位置を占めるものであるといえる。将来の都市づくりを展望し計画する上でこの史的遺産が保有する豊かな歴史的・空間的情報を積極的に活用することが重要である。

4. 2. 産業的側面

(A) 農業と天満宮。地域共同体の宗教的中核は氏神としての産土神(うぶすな)であり、氏子は祭礼を通じて属する共同体の価値を再確認し連帯感を維持した。産土神はまた生産と収穫を司るものとして信仰された。小松市においても神社総数156社のほとんどが集落毎の産土神である。天満宮は産土神ではないので地域共同体との直接つながりがない。しかし天満宮がおこなう11月の新嘗祭(新穀感謝祭)が農業祭になり宮司が3日を要して末社14を巡回し祭りを執行している。末社は氏神であり、末社がカバーする地域は2150所帯になり、農地の多い梯川右岸地域であるので、農業とのつながりはまだ強いといえよう。

(B) 商工業と天満宮。利常が小松入城に際し、多くの職人、商人をともなった。その時羽二重、蚊帳絹、糸縮織りの導入を計り織機の改良を奨励したこと等により小松絹は主要産物となった。利常を小松の商工の基礎に功ありとしてあがめる気風は根強い。利常を祭った小松神社を昭和12年金沢尾山神社から小松天満宮に移し「利常公宮渡祭(商工祭)」行ってきたが、近年全市的におこなわれる「どんどん祭り」(主催市商工会議所・市農協・小松市)にとって代わられた。天満宮例祭「小松祭り」や「夏祭り(筆祭り)」の時には市内各業種から多くの献灯が並べられる。これらのつながりは直接に「商売繁盛」を旨とするより利常への感謝の念や、学問・文化の神への表敬を主体にしたものと解しておくべきであろう。

(C) 観光。小松市内の主な観光地は、那谷寺、粟津温泉、ハニベ岩窟院、安宅の関跡等であり、小松天満宮は観光地として開発されていない。しかし、社殿是那谷寺と同じ山上善右衛門の作であり、

境内に梅林、樹齢数百年の「どうだんつつじ」があり、祭礼寺には能、謡が演じられこれらは、観光資源としての高いポテンシャルを持っている。これらがうまく引き出せていない問題点は、ＪＲ小松駅から１．５ｋｍと離れており、大きな駐車場がない。来訪者の多い他の観光地と周遊性に欠ける。天満宮が堤防より低地に建っているため景観が損なわれ観光的魅力が不足している。

４．３．市民生活的側面

(Ａ) 宗教、神社と地域社会の関係は戦後大きく変質してきた。小松市内の他の神社、寺院等の中に占める天満宮の特徴は次ようにまとめられる。(１)信仰の対象が天神、利常といった非土着的あるいは広域的人格が大きな比重をしめ、産土的、氏神的要素にかく。(２)それを受けて市民の側でも地域的・集団的なつながりより、広域的・個人的な支持特性を示し崇敬社として位置づけている。(３)天満宮側では、周辺地域にも支持基盤を拡大していくための方途を模索している。

(Ｂ) 祭礼・イベント、小松市内に多くの社寺が存在しており主な祭礼・イベントはこれらの社寺と関係する。「お旅まつり」(菟橋神社、日吉神社)、「どんどん祭り」(市商会議所・農協・小松市)が最も多くの人出となっている。天満宮の行事はかならずしも盛大華麗でないが伝統と格調があり文化的色彩が強い。

４．４．都市計画的側面

(Ａ) 周辺地域の街並、梯川左岸地域は旧北陸街道に沿った軒並が残り、商店の集積、武家屋敷地区、寺院等良好なアメニティを形成した街区となっている。右岸地域は新しい集落があるものの天満宮を考慮にいれた配置ではない。周辺地域の平面構成からは、天満宮が街区形成の要素に位置付けられているとは考えにくい。天満宮の敷地は県道や堤防の天端より低く周囲から天満宮の集積が見られる。梯川の河川敷が狭いので利用は限られており、川面は流れが緩やかなためレガッタの練習場となっている。天満宮周辺地区は都市公園及び緑地は少なく、天満宮の保持する緑のストックは極めて重要名都市環境資源となっている。

(Ｂ) 将来方向、最近１０年の市勢は停滞している。小松市の占める人口、工業出荷額、卸売販売額及び着工住宅床面積の対県シェアは低下もしくは横ばいである。こんなため停滞を打開するのに積極的かつ秩序のとれた開発が必要とされている。市の西部は低湿地で航空騒音もあることから市の発展方向は東部丘陵地帯が有力である。東部にウエイトがかけられているが、天満宮周辺でも小松インターチェンジ周辺での土地区画整理事業が始まりこの地区は変化しようとしている。新しく市民センターが核的施設として立地していることから県道小松・根上線沿いが市街地化の方向をたどるであろう。現状では田園の中に位置しているために、天満宮のもつオープンスペースや緑のストックも目立たないが、市街地化の進行に伴いこれらの価値が顕在化してくるであろう。

５．小松天満宮をめぐる市民の意識と行動

５．１．住民意識アンケート調査

(Ａ) 調査のねらいと方法、市民と天満宮とのつながりの特性を把握するため及び河川改修に関する市民の見解を得るためにアンケートを実施した。母集団は、選挙人名簿登載の有権者から定率抽出で(a)小松天満宮周辺地区３００名、(b)(a)を除く小松市全域９００名、各校若いクラスから順に人数まで抽出して(c)小松高校、小松商業、小松市立女子校の３年生男子１００名女子１００名。昭和５９年１０月１２日に郵送、回答１０月３１日。回収率２９．９％。５０代が最も高く３７．０％、若くなるにつれて低くなる。

(Ｂ) 結果及び解析、問は１７問で小問も含まれており全部で２４問。宗教に関する質問群、小松地域に関する質問群、回答者の行動に関する質問群及び回答者の属性に関する質問群から成り立っている。ここでは紙面の関係から最も核心的な問いを一例示す。問１５－「現在、建設省により梯川流域の水害対策が立案されています。これが実施されますと、梯川の氾濫の心配はほぼなくなります、

改修工事にともない、小松天満宮をはじめ、梯川に近い民家の中には移転しなければならない所もたくさん出てきます。これに対して――大規模な拡幅とかさ上げは周辺環境に大きな変化をもたらすので、事業予算が増えても浸水し易い梯川右岸側に、放水路や遊水池などを作るといった水害対策を立てるべきだ――という意見もあります。あなたは、小松天満宮と梯川河川改修計画との関係についてどう考えでしょうか。貴方の御意見に最も近いものを一つだけ選んでください」。(1) 小松天満宮(その自然環境も含む)の方が大切である――5.01%。(2) どちらかといえば、小松天満宮の方が大切である――4.06%。小松天満宮も水害防止も、どちらも大切である――60.62%。(4) どちらかといえば、水害防止の方が大切である――12.65%。(5) 水害防止のほうが大切である――7.4%。(6) わからない――6.68%。(7) その他――1.9%。(8) 無回答――2.15%。市民は「両方派」が圧倒的に多い。次に「水害防止派」が20.1%出、「天満派」が9.1%となっている。年代別では「天満宮派」に10代、50代が多く、「水害防止派」では30代の占める比率が高い。天満宮への親密度別に見ると、「天満宮派」の半数以上は年1―2回、月1―2回行くという高い親密度の人であり、「水害防止派」では、場所だけ知っている、名前だけ知っているといった天満宮未経験者比率が30.0%以上となっている。天満宮への理解度では、「天満宮派」が明暦3年創建という事項以外をよく知っているのに対し、「水害防止派」では、利常が建立したこと、城の鬼門に当たることの二点がよく知られている。

6. 小松天満宮の社会的位置

6. 1 都市形成上の位置付け

明治近代化からオイル・ショックまでつづいた都市像、都市観の変化が生じている。歴史的建造物や町並みに関して、建物単体はもとより、建造物群として保存して行くという国家的姿勢が「都市計画法」や「文化財保護法」等の整備にともない出されている。さらに地方各都市が中央都市のミニチュア版よりアイデンティティを模索する方向にある。このような歴史的方向のなかで、天満宮の諸条件は新しい都市観に基づくニーズに合致することになる。

6. 2 歴史的遺産としての位置付け

小松の歴史時間軸上で、天満宮は創建以来の施設であり、宗教活動を中断することなく継続している。国重要文化財であり文化財的価値に加え史的価値が高い。

6. 3 都市計画における位置付け

天満宮周辺は依然として都市計画上明確な位置付けがない。しかし天満宮に近い小松インターチェンジ周辺地区での土地区画整理が昭和59年に始まり、天満宮の北側、市民センターが梯川右岸の最大の都市核施設としてすでに立地していることから、現状では田園である県道小松・根上線沿いが市街地化の方向に進むのは必然であろう。これに伴い、天満宮がもつ都市空間的ポテンシャルは加速度的に顕在化しそれを計画上とりこんで行く必要も必然的に生じてくると思われる。

<社会構造上の位置づけ>市民意識として宗教施設としての重要な機能に加え伝統継承、文化活動の意識が高まると予想される。市民は天満宮を散歩・遊びといった宗教的行動以外の要素を付加している。天満宮は「やすらぎ」を求める市民の行動に対応できるだけの非日常的空間の量が十分に担保された境内をもっている。

7. 河川改修と小松天満宮

梯川河川改修の策定案(安全度超過確率100分の1、計画対象雨量208mm/日、基本高水流量1700m³/秒)は、(1)建設省北陸地建金沢工事事務所案と、(2)金沢工大中川武夫助教授案があり、紙面の関係上詳しい説明は省略する。複数の本川改修案、並びに複数の本川改修+放水路設置案が出されており、本川大改修事業費437億円(建設省見積、小松天満宮移転費用含まず)に対して放水路設置案は600―850億円と見積られている。代替案の中に小松天満宮の移転補償費用を算定する

ことは極めて困難なため含まれていない。直接関係する事業の経済性のみで代替案を比較することはできない。むしろ、筆者等が指摘したことは、小松市の総合的長期基本構想をまず樹立すること、その際、一定の工業集積力を持った歴史的都市の開発政策は「歴史と近代化」の最もふさわしい実験都市を目指すものでなければならない。放水路設置案は事業費が一見高いが、放水路部分は、右岸の内水排除という直接効果はいうまでもなく、今後農水省による農業基盤整備の一環として単独で行われるものと大差ないか、もしくは建設・農水両省の合体施工による事業費の方が「安上がり」となる可能性もありえる。総じて梯川本川の大規模改修計画は河川周辺の歴史と一体的に形成されてきた市民の生活の場と社会システムを分断することになる。右岸域を治水対策のみならず長期的展望を欠いたままの地域として固定化させてしまうものでありとうてい右岸域住民の賛同を得ることは難しいといわざるおえない。治水対策のあれこれを選択する以上に小松市民の「暮らし」をどのような方向に育成し守って行くのか市民とともに展望するなかで、梯川の治水のあり方を決めて行くことであろう。市民のアンケート結果が示すように「河川改修も天満宮も共に大切だ」という明析な答えは、このことの雄弁な左証であろう。

8. おわりに

小松天満宮等の調査のなかで、最後まで弱点として残ったものの一つは、小松城と天満宮の位置関係を解明する作業である。調査会の結果が出た後、「陰明道」にもとづく創建当時の城郭形成・街づくり理念の解明が研究者の協力で進み、興味深い解析がされている。黒岩重人氏の最近の研究によると、北野より小松への御遷宮の日取り正徳4年(1714)2月24日は、干支で戊戌年乙卯月辛卯日で易卦三震と関係づけると「雷神」=「天神」を意味した、「長子」=「後継者」=藩の存続を意味しているとのことである。また、小松天満宮の社地選定は、「芦城」と呼ばれた水城の小松城を守るために鬼門の地に土盛りにより造成したことに意味があると解釈されている。すなわち「水」が城の生命線でありこれを克する「土」を封じるに「土」を克する「木」=雷神=天神でもって鬼門を封じるという理念が働いていると指摘されている。また驚くべきことに、黒岩氏の発見で小松城の鬼門の方向を延長すれば、金沢城に通じこれは、金沢城の裏鬼門を「小松天満宮」が守ることになる。これらの解明は「調査会構成委員」では出来なかったことで、小松天満宮を正しく理解しアセスメントする意味で不可欠な情報であった。

参考文献

1. 小松天満宮等専門調査報告書「加賀 小松天満宮と梯川」 石川県小松市教育委員会昭和61年3月発行
2. 吉野裕子「陰明五行思想からみた日本の祭」弘文堂、昭和59年6月